



撮影：西山芳一（表紙、並びに当ページ）

## 中島閘門

富山県富山市

富山市は運河のまちだ。明治中期まで、中心部を流れる神通川は大雨のたびに氾濫していた。そのため富山県は一九〇一年に洪水の原因となっていた蛇行部をショートカットする直線状の捷水路の建設に着手する。時を経て一九二八年、富山県は県の更なる発展を目指し新たな都市計画を決定。運河沿岸に工業地帯を興すとともに、運河の開削土を神通川の廃川に埋め立て、新市街地を形成した。この河川整備によって富山は近代化の道を歩み始めることになる。

計画に基づき一九三四年に延長約五・一キロの富岩運河が完成する。運河の河口から約三・一キロに整備されたのがこの人工水路のシンボルの一つである中島閘門だ。パナマ運河方式で、長さ約六〇メートル、幅約九メートル、深さ約六・三メートルの閘室の上下流側に、鋼製・合掌式の門扉を擁している。下流から上ってきた船が閘室に収まったあとに下流側の門扉を閉め、上流側の通水孔から水を通して船を浮上させる。水位が上流側と合ったところで上流側の門扉を開放、船を移動させる。いわば水位差を利用した船のエレベーター

だ。見るからに頑丈そうな門扉は鋼製のスクリプレートと横桁、縦桁から構成され一五、〇〇〇本ものリベットで接合、水密部にはヒノキが施されている。

凍てつくような寒空のもと、閘門が静かにたたずむ。門扉の鋼板は川の水を纏って鈍く輝いていた。重厚な鋼製の門扉、石組、RC造の堅牢な閘室がまちの発展の足跡を今に伝えている。一九九八年、中島閘門は昭和期の土木構造物としては全国初となる国指定重要文化財に認定された。



昭和30年代にトラック輸送が主流になると、運河と閘門はその役割を終える。埋立も検討されたが、県は保存と再生を決断し老朽化した中島閘門も1998年に蘇った。富岩運河一帯は親水公園として整備され、市民に愛される憩いの場となっている。中島閘門も観光船を往来させる水運施設として現役で稼働している。